

「サクワ」

静岡県 丸山 桜様

「ママ、今日、サクワね、幼稚園で…」

「だから、『ワ』じゃなくて『ラ』！何度も言ってるよね？サクワじゃなくて、サクラよ！」

幼少期、異国の地で私が自身の名を言う度、母は鬼のような形相で幾度も言い聞かせた。

母の故郷・広島で生まれた私は、父の仕事の関係で幼少期を海外で過ごした。この国の言語には、『ラ』という発音がない。だから、ここでは私は「サクワ」と呼ばれるし、ここで育った私も『ラ』が言えず、自分の名を正しく発音できず、『サクワ』と呼んでいた。

スプーン&フォーク文化の国で育つ幼い娘に母はそれらの使用を許さず、徹底的に正しく美しい箸使いを教え込んだ。当時は、厳しい教育ママが疎ましかったが、今なら分かる。

国語教師だった母は、異国で育つ娘が母国を忘れぬようにと人一倍熱心に躰けていたのだ。

十年後、日本に帰国すると、東京で暮らすうちに、いつしか私は自身の名を『サクラ』と自然に発音できるようになっていた。

時は流れ、父は病で他界し、大人になった私は都会で働いていた。ある冬の日、故郷の広島で暮らす母を訪ねた。「桜の季節に結婚するよ」と伝えると、母はとても喜んでくれた。

「さあ、お茶にしよう。本物の桜を見るにはまだ早いから、とりあえずこれでお祝いね」

「わあ、可愛い！」

母が緑茶と共に出してくれたのは、桜をかたどったキュートなソーセージだった。

「名前は一生モノ。結婚して姓が変わっても、名前は変わらない。古今集の時代から、花と言えば桜を指したの。桜を歌った和歌は無数にあるよ。古今、桜は日本人に最も愛された花。だから私は、生まれてすぐ日本を離れる娘に、母国を離れても日本人が最も愛した花を、日本の伝統美を覚えていて欲しい。桜のように、皆に愛される人に育って欲しい。そんな願いを込めて、あなたに桜と名付けたの。」

母は深い眼差しで私を静かに見詰め告げた。母の言葉が胸に染み、目の奥が熱くなった。

ピンク色の桜をひとひら、箸で摘むと咀嚼した。涙のような優しい塩気を丁寧に味わう。『実は、初めて一緒に食事をした時、今時珍しいくらい箸使いが綺麗な女性だなあって、一目惚れしたんだよね。将来、こういう人とあったかい食卓を囲みたいなって思ったんだ。』夫となる人は、そうプロポーズしてくれた。

つまり、この幸せも教育鬼ママのお陰ってこと？苦笑いしながらピンク色の花ソーセージを食べると、何だか心までピンク色に染まってゆくようでハッピーな心地になった。

今度は彼と来て、この『桜』を食べさせてあげよう。

「うちのサクラが、やっとなサクラワ」

乙女チックな花ソーセージを食べながら、サムすぎるオヤジギャクを言って笑う母。皺が刻まれた目元が潤んで、キラリと光った。

鬼の目にも涙？人前で決して泣かない鬼ママが、まさか……。年を取ると涙脆くなるのか。これからは親孝行しなくちゃなと反省した。

広島から届く宅配便。花ソーセージを見る度に感じる。私の名に託された母の想いを。